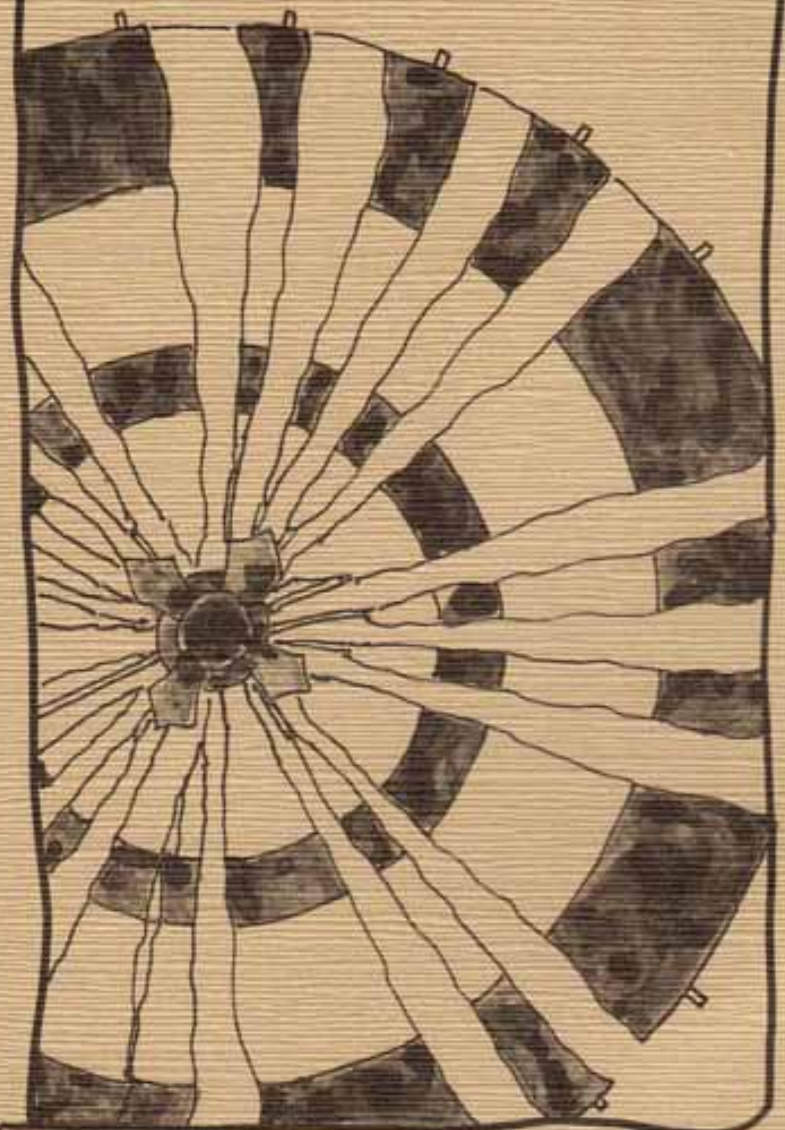


やぶれ傘



一二三号
二〇二一年十二月

雪吊の張り出してゐる下に鯉 根橋宏次
 秋の蚊の羽音時計は午前二時 きくちきみえ
 冬田道どうやら知らぬ人がくる 大島英昭
 新しき切株ふたつ枯木立 藤井美晴
 公園のぎつたんばつこ木の葉散る 廣瀬雅男
 暖房が効いて甘めのジンファイーズ 青谷小枝
 捨ておきし鉢に紫式部の実 止久保 勲
 柳散る閑伽桶棚に古束子 瀬島酒望
 陰にある流れに冬の鯉群れて 小山よる
 赤子鳴くこゑは刈田の向こうから 秋山信行
 アナウンサー頻りに今日の寒さ言ふ 安藤久美子
 城跡に薄日差しけり返り花 天野美登里
 冬の川星のまたたく空浮かべ 白石正躬
 種茄子が埃に塗れ畝隅に 渡邊孝彦
 撫でさすり棺に入れる冬帽子 有賀昌子

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大 崎 紀 夫 選

早く来いと妻に呼ばるる十三夜 浅嶋 肇
 露寒や朝餉の碗にもろ手当て 石原健二
 トラックの後追ひかけてゆく落葉 泉 一九
 木漏れ日が畳に揺るる冬隣 奥田温子
 秋うらら富士の裾野に雲の帯 亀岡睦子
 後輩が呼びかけてをり赤い羽根 木村瑞枝
 匙の音立ててカレーを暮の秋 倉澤節子
 小春日の坂下りきればオホーツク 小泉里香
 竹寺の膳に紫式部の実 小巻若菜
 秋逝けり惜しむ暇もなきままに 竹内文夫
 さくさくと砂利ふみ夫と菊花展 貫井照子
 月白の田圃に犬の声のして 萩原溪人
 足裏に湿布小さく十三夜 橋本美代
 青空をつくづく見遣る秋の暮 本郷美代子
 寒き朝靴音ひびくコンコース 吉田幸恵

煙 茸

大崎紀夫

雨樋と壁灼けてをり馬穴また
本棚を見ると蠅虎がゐる
いなご捕る子らがたちまち遠去かる
蟬しぐれゴミを出す日のゴミを出す
日は真上かぼちやの花は道ばたに

また釣れてくる菱の実の真黒な
籾殻を焼く煙突ははすかひに
砂利道にちよぼちよぼと草ちちろ鳴く
秋の雨タイヤぐにやりと接岸す
竹煮草田んぼの上が暮れてゐる
手の柘榴皿にこつんと置いて夜
草の花ベンチにみると鳩がくる

雪吊

根橋宏次

回されて壺立ち上がる昼の鴟
 魯田のあたり明るく暮れにけり
 朝寒のどちらからともなき会釈
 金柑のあたりへ畑からけむり
 川舟の細身が草に冬近し
 そのままの丈に紫苑の枯れてをり
 冬うらら漁港を過ぎてまた漁港
 鯉が口揃へてゐたる七五三
 冬の蠅鱗の乾く干し網に
 雪吊の張り出してゐる下に鯉

秋の蚊

きくちきみえ

ひとつづつ嗅がれてゐたる榎櫃の実
 落葉集める透明なゴミ袋
 のら猫の行方は知れず冬に入る
 霜月の車庫へ電車の入る音
 冬の半月ふくらんでゆく気配
 冬の月家の中より犬のこゑ
 吸ひ殻の捨てある日向石露咲けり
 皆既月食カキフライ揚げてゐる
 譲らるる座席に冬日差してゐる
 秋の蚊の羽音時計は午前二時

冬田道

大島英昭

飛蝗見てをれば二機目のプロペラ機
庭木刈る腕の速さが遠目にも
下校の子途絶えて鴟のこゑしきり
荷物積む音十月の養蜂所
秋の蝶竹の走り根つやつやと
櫛もみぢ脚立が立ててありにけり
庭先に何といふことなき黄菊
やはやはと火の見櫓に日があたり
冬田道どうやら知らぬ人がくる
残りたる葉はみな枯れて葡萄棚

枯木立

藤井美晴

蔦もみぢコンクリートの道を這ひ
紅も青も鶉上戸の実
銀杏散る道を百円バスが来る
黄ばみたる月が枯木に晩翠忌
大樟のもとの祠の神の留守
ヴェランダをふうとゆきけり雪蛭
重機来て古屋をむしる冬早
冬の夜の卓に昨日の新聞紙
短日の杉の上枝に鳥群れ
新しき切株ふたつ枯木立

木の葉

廣瀬蝗男

十月や空にひとつのちぎれ雲
鶉の鳴いて鎮まる屋敷林
鶺鴒の少し走りて止まりけり
今そこに居てもう居ない石たたき
山ぶだう熊の爪あと残る木に
トラツクの荷台に梯子松手入れ
括られしなりに咲きたる残り菊
街川に鷺の来てゐる冬日和
写生の子落葉集めて座りけり
公園のぎつたんばつこ木の葉散る

暖房

青谷小枝

手でかこふグラスのまるみ秋の夜
十三夜スープしづかに煮えてをり
きぬかつぎ青き九谷の手塩皿
明けてきて霧晴て来て雑木山
いてふ散る陽のよく当たる市営墓地
肉まんの昼餉ベンチに木の葉降る
仲見世の早じまひして後の月
蕎麦湯注ぎ足して時雨の過ぐるまで
冬夕焼け蛇口の水の風に散る
暖房が効いて甘めのジンフィーズ

紫式部の実

丑久保勲

宵闇をアップビームで来る車
歌舞伎座のチケット売り場秋ともし
秋の薔薇齒科医は大谷石の家
すかすかの桜紅葉となりにけり
障子貼り替へて家中静かなり
茶柱の立つ益子焼小鳥来る
LEDの電球替へる夜寒かな
捨ておきし鉢に紫式部の実
冬近し古本市の人だから
マグカップで啜るコーヒー冬近し

柳散る

瀬島酒望

鶏小屋の裏手に咲いて曼珠沙華
懸崖の仕上に掛かりゐる菊師
鍵掛けてをり田仕舞ひの農小屋に
朝寒しアッサムティーにラム酒入れ
走り蕎麦庭に足踏み脱穀機
すぐ下に仏足石が松手入れ
玄関の小棚に置いて新松子
柳散る閑伽桶棚に古束子
池に鴨小屋に家鴨がゐる小春
電柱を建て替へてをり花芒

冬の鯉

小山よる

秋時雨まだ履き慣れぬスニーカー
どうでもいい深夜番組栗つまむ
スプレーのいたづら書きに秋西日
分離帯に泡立草が花つけて
冬ぬくし自分の影で子は遊び
シリコンの匙噛みしめる冬の夜
枯れて立つ狗尾草に日は当たり
湖の対岸ずっと冬紅葉
陰にある流れに冬の鯉群れて
黒き実はネズミモチの実空白く

刈田

秋山信行

門柱に転居の知らせ秋時雨
冬めける犬は日向の匂ひして
参道の左右に萩の花こぼれ
つまづきし児が立ちあがる草紅葉
秋風に居間のカーテンすこし揺れ
畑隅に茗荷の花の二つ三つ
赤子鳴くこゑは刈田の向こうから
秋夕焼け鴉は杭に鳴きつづけ
白山に雲のひと刷け吾亦紅
飛び石に雨粒はねる曼珠沙華

裏木戸に届く弁当鏡花の忌
亡き姉の子はもう二十歳金木犀
山小屋に灯りのともる月夜茸
陽は海をそめて背高泡立草
胡桃割る杳脱ぎ石の角にあて
朝からの雨上りけり竹の春
天高し高きにハンダグライダー
海に秋の色濃く真珠養殖場
城跡に薄日差しけり返り花
室咲や出窓の猫ののびをして

返り花

天野美登里

今日の寒さ

安藤久美子

霧立ちて右も左も森の道
コンビニの明り夜長の街照らす
小春日の玄関に立つ家族かな
好き日なり尾長の五羽が枯枝に
メロンパン齧り炬燵を占領す
湯冷めせぬ間に腰に貼る湿布葉
鞆は電子辞書引く指先に
浅草の冬の夜景が窓過る
冬の虫確かに生きてゐるやうだ
アナウンサー頻りに今日の寒さ言ふ

冬の川

白石正躬

彼岸花土手にひと叢色あせて
秋の山径ゆづる児が「こんにちは」
白花の秋明菊が咲きにけり
柿の実が色づきにけり葉が落つる
朝寒の鳥のひと声ありにけり
夜寒し渡し場の灯を右に見て
小春日の渡しは水尾を長く引き
橋渡る車の窓に冬没日
焼藪の袋を持つて児が走る
冬の川星のまたたく空浮かべ

種茄子

渡邊孝彦

揺れ続く芒中央分離帯
椿の実ばかり見てゐる立ち話
秋楡の樹皮の斑や小鳥来る
薬医門抜け稲荷社の薄紅葉
朝寒の遠き街並みくつきりと
ユリの木の黄葉かつ散るバスの屋根
種茄子が埃に塗れ畝隅に
樟の幹回りの神籤七五三
草枯れて立入禁止てふ角地
ひよいと片手で引き抜いてゆく大根

◇1月・2月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
1月	4日(火)	AM9:00	こなから会	あいソバル	WEP編集室
	4日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	5日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	7日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	15日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(土)	AM10:00	楽天会	あいソバル	廣瀬雅男
	22日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
2月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいソバル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	7日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン2	丑久保 勲
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	20日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	大宮第2公園梅園	丑久保 勲
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいソバル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

[注] ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

2月20日(日)の吟行。

午後の句会場が取れず、2時の集合。句会は6時より。

集 合 午後2時。JR大宮駅中央改札口前。

吟行地 さいたま市・大宮第2公園の梅園。

句会場 武蔵浦和コミセン・第1集会室

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

撫でさすり棺に入れる冬帽子
 ぶら下がる糸瓜揺らして通りけり
 隣人の一人が欠けて秋深む
 ポケットの木の実で遊ぶ待ちぼうけ
 秋茄子の紺浮きあがる白磁皿
 津軽野の藁焼く煙秋深し
 親子猫横切る先に萩みだれ
 銀杏散るいつもの坂を上りゆく
 朝露を踏みつつゆけり犬のあと
 曼珠沙華お堂の奥に猫が坐し

冬帽子

有賀昌子